第九回萬國哲學會の印象

澤瀉久敬

七月三十一日、佛國大統領臨席、文部大臣司會の下に開會されました第九回萬國哲學會は、八月六日ラランド教授司會の閉會式を以て無事終了致しました。この期間の諸講演が Actualités scientifiques et industrielles に十二册の分册となつて全部出版されましたことは御承知の通りにて、その內容を一々御報告申上げますことは却つて僭越と存じ上げます。たゞ、當地に居た機會を利用しこれに出席した一員として感覺的に觸れ得たこの哲學會の印象を以下に御一報させて頂きます。御徒然にもし御高讀を賜ることが出來ますればこの上なき喜びでございます。

先づ第一日に M. Brunschvicg は "Transcendance et immanence なる題目の下に、この兩者は對立的相關概念でなく、むしろ二つの價値樣態であるとし、imagination en hauteur と réflexion en profondeur なる代用語を通して感覺主義に對する數學的精神(esprit)主義を說かれました。この日 M. Gabriel Marcel は Le transcendant comme métaproblématique と題し、〃私の死〃は non-problématique であり、そこに〃もはやない〃と云ふ méta-problématique が生じ、我々を越えると共に我々の外にあるものとは考へ得ぬ或る實在を分有することが超越であるとして、形而上學と神祕主義とは判然區別され得ぬものであると論じました。

これに對し、M. Brunschvicg は désintéressement こそ哲學の根本でなければならぬと主張し、G. Marcel の死は G. Marcel に取つて重大な程 L. Brunschvicg にとつて重大ではないと言ひ、聽衆が思はず大笑ひを致し

ましたら M. Brunschvicg は嚴肅な面もちにて、〃否これは笑ひごとではない〃と附け加へました。これに對する M. Marcel の返答は、私の死は私個人にとつても問題ではなく私を越えたものとの關係に於て私の死が問題であるといふにありました。

M. J. Wahl も同日同會堂に於て transcendance の觀念の subtil な現象學的解明を行はれました。(titre—"Sur l'idée de transcendance") 同教授が自分自身の立場を正面から示されたのは恐らく今度が始めてと存じますが、我々はそこにキエルケゴール的色彩を感じ、殊に極めてひかへ目乍ら〃現實が凡て數學的に解決され樣とは私には思へない〃と言はれたことは Brunschvicg-Marcel の一騎打のあつた後丈に小生の耳に强く殘りました。恐らく Brunschvicg 教授も自分が四面楚歌の内にあることは感じてをられるでせう。しかもその内にあつて老體を自ら討論に加はり反感覺論をかざして學的道德的無私の立場をあくまで主張せむとするその態度に小生は强く打たれました。

しかし一般の動きは反 Brunschvicg です。M. Maurice

Blondel (Aspects actuels du problème de la transcendance) の講演が全會期中で最も多くの聽衆を集めたことがそれを反映してゐると考へます。凡ゆるものの制約としての絶對者を說くと共にその哲學を身を以て生き自ら自分を乘り越える自由を超越として人類愛を叫ぶ同教授の眞摯な熱辯は滿場の聽衆を魅し去りました。その他既成精神病學及び生物學への絶對信賴を捨て、現象學的空間を語る M. E. Minkowski (L'âme et les phénomènes psychiques) 社會的歷史的な無意識的"mentalité"を提唱する M. Guitton ("Valeur spirituelle et mentalité") 等、結局 antiintellectualisme こそ現代フランス哲學の一般的傾向であると云ふのがこの哲學會が小生に與へた一つの結論でございます。

他方、獨逸からは Dr. Heyse が政府の代表として出席 Idee und Existenz, die Krisis der Philosophie und die Werte des Lebens. なる講演を致しましたが小生は他と重なりこれへは出席致しませんでした。O. Becker は報告は出しておき乍ら講演せず(恐らく來佛しなかつたのでございませう) N. Hartmann は出席しましたが

講演しませぬでした。英國の W. D. Rose 教授の Meaning of good へは期待をもつて出ましたけれど、功利主義的色彩のこの個人道德には小生はそれ程興味を惹き得ず、たゞ同教授の風貌の示すいかにも教養ある紳士の感じをこの學說の內にも感じました。(この點 Robin 教授はあくまで史家の立場にとゞまり、その La classification des sciences chez Platon に於て、分割の方法は分析ではなく綜合であり、それは ordre の idée によつてなされ、pureté である l'être への過程がそれであつて、mélange である凡てのものの內、善が最高の mélange であると述べられました。但しこの講演は同教授の立場に於ける優れた Platon 哲學要約の樣に小生には思へ、それを更に要約することはその血肉を削りて生命なき骨片と化する氣が致します。むしろ、久し振りにお目にかゝつた同教授が恐らく名前を御存知あるまい小生にまで Comment ça va? と話かけられる無邪氣さをお傳へ申上げる方がこの御報道の主旨に適ふかと存じ上げます。) 英米哲學では New York の Montague 教授の Substance, potentiality and cause のまとまつた常識哲學を却つて面白く聽きました。それと共に小生が他の講演を待つ間にい、加減に這入つて興味を惹かれましたのは Petronievics (Belgrade) の L'âme et le cerveau du point de vue monadologique で、よし同教授の反駁する Flechsig の說は旣に生理學そのものの內で修正をうけてゐるものとは言へ、腦機能の monadologie 的說明は暗示を含む假說と存じました。

純哲學的問題以外では小生は科學哲學の部門に多く出席致しました。併し名に聞いてゐた諸大家の研究報告は、新しいものを築き上げるよりも過去の精神史或は自己の行蹟を簡明に要約するに留つてゐた樣に感ぜられました。

L. de Broglie の Réflexion sur l'indétermination en physique quantique は M. de Broglie によつて代讀されましたが、それも今まで方々で述べられたことからそれ程出てゐるものであるとは思へませぬ たゞその明澄なる解說の中に、何時も乍ら、その天才を認めぬわけにはまゐりませぬでした。Enriques は Le problème de la raison に於て、認識は主客の相關に成立すると云ふ

のが過去の認識論の結論であり、それから生ずる科學概念を絶對的とせず歴史的に批判發展させてゆくところに新認識論があると說きました。Reichenbach は "La philosophie scientifique ; une esquisse de ses traits principaux" に於て絶對眞理を求めたデカルト的態度に對し最も近似的な確率を求めてゆくのが近代の科學的態度であるとしました。事實、議論はしば〳〵 probabilité の上に落ちましたが、その確率なるものも結局は普遍的歸納の前提に立つものであり從つて現代科學も根本假定に於ては過去の科學から一歩も出てゐないと言つたのは Bruxelles の Parzin (Probabilité et déterminisme) でございます。この講演は Keynes, von Mises 及び Reichenbach の說の分析を通してなされ、それに對し Reichenbach はあくまで蓋然性にとゞまらうとするのが自分の立場の特色であると辯明し、Parzin は科學者の présupposition を更に論理的に考へてみたのであると答へました。なほ青年學者 Pos (Amsterdam) の L'origine de la méthode は calcul と méthode を區別し、méthode とは精神が自己を反省する態度であると致しましたのは méthode そのものの本質を哲學的反省にもたらし精神主義的解釋を明言した點に於て注意をひきました。

併し更に小生の興味をひきましたのは少壯數學者等の動きでございます。B. de Kerékjártó (ハンガリー) の La méthode de Descartes et la géometrie moderne は哲學的であるよりも數學的でございましたが、かく簡明に幾何學的概念を要約することは數學者自身の哲學的反省を容易にするものではなからうかと考へます。又 Destouches (Paris) の Les caractères fondamentaux des théories atomiques が現代分子學說の可能の制約と假說に肉迫しやうとするのを見る時、やがてはこの數學者自身が更に具體的な物理學的假定へ物理學を導きはしないかとも思はせます。更に公理主義と直觀主義の批判から activité mathématique を强調する Cavailles (Amiens) : Réflexions sur le fondement des mathématiques, 又、哲學的問題の解決を數學の内に見出さむとする Lautman (De la réalité inhérente aux théories mathématiques) 等、これら氣鋭の青年學者等が潑剌として議

論を闘はすのを見る時、フランス哲學の將來を豫言する無謀は愼むと致しましても、小生には純哲學方面よりもむしろこの方面の現在に新鮮さを感ぜぬわけにはまゐりませぬでした。

以上が第九回萬國哲學會への小生の印象でございます。萬國哲學會乍ら主として佛蘭西哲學者等を知らうとした小生の見地は別と致しましても、毎日五、六十からある講演の中から六つを選ぶといふことは相當無理でございました。それに、討論時間の長短から、豫定しておいた講演への出席もしば〳〵狂はされてしまひました。かゝる條件の下に得ました上記の印象が餘りにも一面的なものではない樣にとねがつてをります。なほ、大講演は Fréchier 教授が全部司會されました。聽講者が講演者に拍手をおくる時ぢつと嚴肅な態度を持して居られた隻腕の教授は、閉會式の日、滿場の會員が續いて止まぬ感謝の拍手を教授におくつた時にも、顏色もかへず身動きもせずに、ぢつと一ところを見つめてをられました。（田邊教授への書信から）